

# ダルマチアにおける ボスニア・ヘルツェゴヴィナ蜂起の影響

石田信一

## 要旨

オーストリア支配下のダルマチア地方は一八六〇年代に「民族再生」と呼ばれるナショナリズムの時代を迎え、それまで明確な国民意識を持たず、しばしばコスモポリタンの態度を示していた住民の間でも、さまざまなタイプの国民形成の試みが見られるようになった。クロアチアおよびセルビアという「本国」の影響を受けつつ、同じスラヴ系住民の分化、すなわちカトリック教徒の「クロアチア人」化と正教徒の「セルビア人」化がほぼ同時に進行した。本稿では、このような時期に勃発したボスニア・ヘルツェゴヴィナ蜂起（一八七五～一八七八年）を取り上げ、同時代の新聞・雑誌記事および政治的指導層の書簡集等の分析を通じて、この事件がダルマチアにおける国民形成過程に及ぼした影響について再検討した。

ボスニア・ヘルツェゴヴィナ蜂起はオスマン帝国からの解放を目標とするものであったが、もとより多民族・多宗教が混在する同地の帰属問題をめぐっては、クロアチアとセルビアが自国への併合を求めて争っていた。それまでクロアチアやセルビアほどに住民の国民的帰属意識が明確でなく、共通の「民族派」を組織していたダルマチアのスラヴ系住民も、「本国」のプロパガンダやメディアを通じた論争によって、クロア

チア志向の人々とセルビア志向の人々に二分されるようになった。そして、蜂起終結後にセルビアへの併合を支持する正教徒指導者が「民族派」を正式に離脱して「セルビア民族党」を結成したことにより、両者の政治的分裂は決定的なものとなった。それと同時に、ダルマチアのスラヴ系住民は「クロアチア国民」あるいは「セルビア国民」という二つの異なる国民理念の下で、国民形成の新段階に入ったと考えられるのである。

## はじめに

バルカン半島西部、アドリア海東岸に位置するダルマチア地方（現在では一部を除きクロアチア領）は、オーストリア帝国の支配下で一八六〇年代に「民族再生」と呼ばれるナショナリズムの時代を迎えた。この時期になると、それまで明確な国民意識を持たず、しばしばコスモポリタンの態度を示していたダルマチア住民の間でも、さまざまなタイプの国民形成の試みが見られた。当初、住民の圧倒的多数を占めるスラヴ系住民は漠然たるスラヴ人（南スラヴ人）意識しか抱いていなかったと考えられるが、一八六〇年代後半にはそうした意識と重なりつつ、それに対抗しさえするクロアチア人意識やセルビア人意識が芽生えていった。クロアチアおよびセルビアという「本国」の影響を受けつつ、カトリック教徒の「クロアチア人」化と正教徒の「セルビア人」化がほぼ同時に進行していったのである。そして、このような時期に勃発したのが、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ蜂起（一八七五～一八七八年）と、その結果としてのオーストリアによる同地占領であった。本稿では、同時代の新

聞・雑誌記事および政治的指導層の書簡集等の分析を通じて、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ蜂起がダルマチアにおける国民形成過程に及ぼした影響について再検討したい。<sup>(1)</sup>

### 一・ボスニア・ヘルツェゴヴィナ蜂起

ボスニア・ヘルツェゴヴィナはオスマン（＝トルコ）帝国の北西端、ヨーロッパ側の最深部に位置し、オーストリア・ハンガリー帝国のダルマチアとクロアチアに隣接する領土であった。行政区分上、ボスニアはほぼ一貫して州（ヴィラエト）としての地位を維持していたが、ヘルツェゴヴィナは独自の州である時期とボスニア州に属する県（サンジャク）である時期とがあった。<sup>(2)</sup> 面積はあわせて約五万一〇〇〇平方キロ、人口は一〇〇万を超え、その殆どがスラヴ系住民であったが、宗教別では正教徒とイスラム教徒がそれぞれ四割程度、カトリック教徒が二割程度を占めたと推計されている。<sup>(3)</sup> 住民の九割近くが農民であったが、地主・自由農・小作人の比率は宗教ごとに大きく異なっており、イスラム教徒の優位が歴然としていた。<sup>(4)</sup> 実際、キリスト教徒農民は一九世紀半ばに

はイスラム教徒の地主に対して局地的反乱を繰り返すようになっていた。ボスニア＝ヘルツェゴヴィナに隣接するセルビアとモンテネグロは、言語と宗教の共通性から、これらのキリスト教徒農民、とりわけ正教徒を「同胞」とみなしていた。そのため、両国はオスマン帝国から事実上の独立を達成していく過程で、同地の併合を視野に入れた積極的なプロパガンダを展開するようになった。それは、一八六〇年代を通じてドイツおよびイタリアにおける影響力を失ったことにより、バルカン進出に活路を見出すようになったオーストリア＝ハンガリーの領土的野心と競合するものであった。オーストリア皇帝フランツ＝ヨーゼフは一八七五年四月から五月にかけてダルマチアとボスニア＝ヘルツェゴヴィナの国境地帯を行幸し、自らの要求を対外的にも明白に示した。<sup>(5)</sup> 非公式には、オーストリア＝ハンガリーとセルビアによるボスニア分割案も存在したとされる。<sup>(6)</sup> いずれにせよ、オスマン帝国の弱体化による「東方問題」の解決は、住民の意向とは関係なく、主としてヨーロッパ列強の外交交渉に委ねられていたのである。

このような時期に勃発したのが、一八七五年七月にヘルツェゴヴィナのネヴェシニエで始まったボスニア＝ヘルツェゴヴィナ蜂起である。それは前年の凶作に加えて、相変わず過大な貢納や賦役を課されてきた農民の不満が爆発した結果であり、発端において「オスマン当局やムスリム地主の圧政に対する社会的抗議」としての性格を帯びていた。それまでの局地的反乱とは異なり、この農民反乱は短期間のうちにボスニア各地に飛び火していった。何よりも重要なのは、このようなキリスト教

徒農民による大規模な反乱の発生が、かねてから同地に対して領土的野心を抱いていたセルビアおよびオーストリアにとって、自らの要求を実現する絶好の機会となったことである。

## 二. ダルマチア側の対応

一八六一年に開設されたダルマチア州議会においては、自治派と民族派という二つの政治グループが対抗関係にあった。自治派は親イタリア的であり、ダルマチアの自治的地位の保持を主張したのに対して、民族派は南スラヴ諸民族の連帯を唱え、ダルマチアとクロアチアの合併さえ要求した。少なくとも初期の段階では、民族派は南スラヴ理念によって一体性を保持しており、その立場はクロアチア・ナシヨナリズムやセルビア・ナシヨナリズムと一線を画すものであった。スラヴ諸邦の勢力拡大をおそれたオーストリア当局の意向もあって、当初民族派は自治派に対して劣勢に立たされていたが、一八六〇年代後半の地方自治体選挙を通じて勢力を拡大し、<sup>(8)</sup> 一八七〇年の州議会選挙において、ついに多数派を形成することに成功した。<sup>(9)</sup> このような時期に、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ蜂起が勃発したのである。

同じスラヴ系のキリスト教徒農民が起こしたボスニア＝ヘルツェゴヴィナ蜂起に対しては、ダルマチア住民が積極的な支援活動を行なった。その中心となったのが、まさしく民族派であった。民族派の機関紙『ナロードニ・リスト』は、ネヴェシニエで反乱が勃発した直後に、その支援をダルマチア住民に呼びかける記事を掲載した。<sup>(10)</sup> それに呼応する形で、

七月下旬にはザダルとドゥプロヴニクを皮切りにダルマチア各地に蜂起を支援する「委員会」が相次いで設立された。<sup>(11)</sup>これらはザダルの「中央委員会」の指揮下で蜂起者への武器・弾薬・食糧の補給や数万人規模の難民保護といった活動を行なった。民族派の指導層、とりわけミホヴィル・パヴリノヴィチとミホ・クライチは、そうした活動に大きく貢献した。

冒頭に述べたように、一八六〇年代後半からダルマチアのスラヴ系住民は国民形成の方向性をめぐる立場の違いから、宗教的差異を強調する形でクロアチア人（＝カトリック教徒）とセルビア人（＝正教徒）とに分化しつつあったが、「委員会」の活動を通じて、両者の友好・協力関係が回復されたかに思われた。しかし、一八七六年にセルビアとモンテネグロがオスマン帝国との戦争に突入すると、両者の対立はむしろ尖鋭化するようになった。彼らはボスニア＝ヘルツェゴヴィナ（以下、ボスニアと総称する）のオスマン支配からの解放に向けて共闘しようと考えていたが、同地の帰属問題に関しては全く異なる立場をとったからである。

より強硬な立場をとったのは、ダルマチア全体から見れば少数派となる正教徒の側であった。<sup>(12)</sup>彼らの居住地はクニンやオプロヴァツなどボスニアとの国境地帯に集中していたが、それらの地方の「委員会」では、セルビア・ナシヨナリズムを唱導していた「統一青年セルビア」の活動家、例えばアレクサンダル・カティチ（クニン）やヴラディミール・デスニツァ（オプロヴァツ）といった人物が中心的な役割を果たしており、

その影響下で、ボスニアとセルビアとの合併を要求した。<sup>(13)</sup>多数派のカトリック教徒は、フランシスコ会修道士などを通じて、こうした動きに對抗する論陣を張った。民族派の指導層の一人であるユライ・ビアンキーニはこう記している。「最初はトルコ崩壊後ボスニアをどうするか問われなかった。この問題が現実的なものとなり、オーストリアの占領の意図がより現実味を増すと、ダルマチアの世論は二分されたのである」<sup>(14)</sup>と。

もっとも、政治家たちの思惑は三分されていたと考えるべきかもしれない。民族派指導層内部に亀裂を生じさせていたパヴリノヴィチら教権派（聖職者グループ）とクライチらリベラル派の深刻な対立が、ここにも反映されたいたからである。第一に、教権派はオーストリア軍によるボスニア占領と同地の「クロアチア国法（国権）」に基づく支配を主張した。第二に、リベラル派の大半はボスニアが将来的に「南スラヴ統一国家」に編入されるべきだと考えていたが、実際には待機主義的な立場をとり続けた。第三に、リベラル派の一部と正教徒指導者はボスニアのセルビアへの併合を主張した。このような見解の相違は、国民形成の方向性をめぐる立場の違いでもあった。それはクロアチア国家とセルビア国家のいずれかを選択することを迫るものであり、「クロアチア人」あるいは「セルビア人」としての分化を決定づけたと考えられる。続いて、各々の立場を再検討していきたい。

### 三、クロアチアへの併合を支持する立場

民族派内の教権派はパヴリノヴィチら聖職者を中心とするグループで

あり、カトリック信仰とクロアチア国民理念を結びつけることによって、ダルマチアにおけるスラヴ系住民の「クロアチア人」としての国民統合を推進しようとしていた。彼らのイデオログとなったのが、ほかならぬパヴリノヴィチであった。ボスニア問題に関する教権派の立場は、パヴリノヴィチの主著『クロアチア対話』において、以下のように明確に示されている。<sup>(15)</sup>

現在のボスニア州はクロアチアとセルビアから分断された領土のつぎはぎ細工以外の何物でもなく、クロアチアのもものはクロアチアに、セルビアのものはセルビアに返還されるべきである。ドリナ川、それとリム川の合流点およびゴラジュデまで、そしてネレトヴァ川源流からネヴェシニエ、トレビニエまでがクロアチア領である。リム川、ゴラジュデ、ネヴェシニエ、リュビニエより南東に向かって、ドゥルミトル山地、ペーチ、コソヴォ地方までがセルビア領である。

パヴリノヴィチの主張では、ヘルツェゴヴィナ東部を除くボスニアのほぼ全域がクロアチア領ということになる。彼はビザンツ皇帝コンスタンティン7世ポルフィロゲネトスの『帝国統治論』以来の多数の関連文献を引用しつつ、これらの領域でクロアチア人が「先住者」であることを証明しようとした。また、彼は「クロアチア国法（国権）」を根拠として、ボスニアを含む歴代の「クロアチア国王」の所領をクロアチア領とみなしていた。

彼はダルマチアと隣接しカトリック教徒が住民の大多数を占めるボスニア＝ヘルツェゴヴィナ西部の「トルコ領クロアチア」および「トルコ領ダルマチア」について、以下のように述べている。<sup>(16)</sup>

我々には「トルコ領クロアチア」がある。それが引き裂かれたクロアチアの一部であることは、世界中が認めている。リヴノからモスタル、ブラガイ、ネレトヴァ川支流のラマ川からドゥモシュ山麓、トレビニエまでが、信仰、言語、志向、伝統において我々のものである。「トルコ領ダルマチア」だ。・・・リヴノの人々に何語を話しか聞いてみよ。彼らはクロアチア語と答えるだろう。ドゥヴノでも、そしてモスタルでも同じだ。

その上で、パヴリノヴィチはボスニア併合要求を経済的見地からも論じている。彼は「ボスニアはクロアチアに打ち込まれた楔だ<sup>(17)</sup>」と考え、ボスニア併合によって「ダルマチアは自然の後背地を獲得し、クロアチアのサヴァ川沿岸地方はバニヤ・ルカやヤイツェを経てダルマチア沿海地方と結びつけられる<sup>(18)</sup>」と主張したのである。ダルマチアにとってのボスニアの重要性は、かつて自治派の思想的支柱であるニッコロ・トマゼオが主張していたことでもあった。<sup>(19)</sup>

なお、彼はボスニア住民の半数が「トルコ人」（現在「ボスニア人」を自称しているスラヴ系イスラム教徒を指すのであって、エスニック集団としてのトルコ人を意味しない）であることを認めつつ、これらの

「トルコ人」をカトリック教徒（＝クロアチア人）とともにセルビアに對抗する勢力として描いていることは注目に値する。両者をあわせることで、「ボスニア住民の大多数はセルビア支配を決して認めない」と主張することができたからである。もっとも、彼は別の箇所ではボスニアの正教徒住民は「東方典礼のクロアチア人」にすぎず、「セルビア人と正教徒を混同してはならない」と述べている。<sup>(21)</sup>

いずれにせよ、パヴリノヴィチがクロアチアの「歴史的領土」の再統一の足がかりとして、オーストリア＝ハンガリー帝国のバルカン政策、とくにボスニア併合の動きを歓迎したのは、このような背景からも当然であった。彼は帝国の拡大と外的変化によってしか帝国の二重体制に変化が生じないことを理解していた。彼は国境の変更と国際関係の変化によってクロアチア諸邦の統一が実現され、クロアチアの地位が改善されることを期待して、オーストリアのボスニア獲得を支持したのである。ボスニアのカトリック教徒のエリートであるフランシスコ会修道士はこうしたパヴリノヴィチの立場を積極的に支持し、オーストリアによるボスニア「解放」を要求するようになった。

こうした教権派の動きは、フラニョ・ラチュキ、ヨシブ・シュトロスマイヤールクロアチアの南スラヴ主義者の間では多分に批判的に見られていた。一八七五年五月、ヘルツェゴヴィナ蜂起が勃発する直前、ラチュキはシュトロスマイヤール宛書簡の中で、ボスニア併合によってクロアチア諸邦の統一が実現されるといふパヴリノヴィチの楽観的立場を、オーストリア＝ハンガリー帝国の統治機構上も国際関係の諸状況からも

「根拠がない」と批判している。<sup>(22)</sup>しかし、ラチュキの批判は必ずしも正鵠を射たものではなかった。統治機構上の問題について言えば、仮に帝国がボスニアを併合したとしても、ハンガリーがクロアチアやダルマチアにボスニアを与える可能性が低いことは、パヴリノヴィチも十分に承知していた。しかし、彼はクロアチア諸邦の統一が実現されないまでも、クロアチアやダルマチアはさまざまな形でボスニア併合の恩恵を受けるだろうと計算していた。また、国際関係上の諸状況にしても、帝国は一八七七年までにロシアと秘密協定を締結し、さらに一八七八年のベルリン会議ではイギリス、ドイツとも同盟した。パヴリノヴィチはドリナ川・リム川以東をロシア＝セルビアの勢力圏、それ以西をオーストリア＝ハンガリーの勢力圏と想定する新たなボスニア分割案を知っており、セルビアがボスニアの大半を獲得することはないと考えていた可能性もある。<sup>(23)</sup>パヴリノヴィチは少なくともラチュキよりはそうした全般的状況を理解していたと考えられるのである。

一八七六年にオスマン帝国に対して宣戦したセルビアが短期間に予想外の敗北を喫したことによって、セルビアは東方問題を解決するファクターとはなりえないという認識がクロアチアとダルマチアの南スラヴ主義者に広まっていった。彼らは南スラヴ諸民族の利益にかなう形で東方問題が解決されることに疑問を抱き、ロシアとオーストリア＝ハンガリーなど列強が介入するだろうことを、ようやく理解した。パヴリノヴィチらはそのことを理解しつつも、オーストリア＝ハンガリーがボスニアを獲得すれば「国法（国権）」に基づいて遠からずクロアチアに帰

属することになるだろうと考え、そのための闘争を継続した。いずれにせよ、彼らがこの時期までにセルビアに希望を繋ぐような形での南スラヴ主義を放棄し、クロアチア・ナシヨナリズムあるいは大クロアチア主義への傾斜を強めたことは明らかであろう。<sup>(24)</sup>

#### 四. セルビアへの併合を支持する立場

一方、ほぼ同じ時期に、ヴォイヴォディナのセルビア人政治家の間では「大セルビア主義」的要求が公言されるようになっていた。オスマン支配下のボスニア、モンテネグロ、アルバニア北部をセルビアに併合し、中世セルビア国家を再興するという構想は、イリヤ・ガラシヤニンが策定したセルビア公国の外交上の指針、いわゆる『ナチュルタニエ』において提示されていたものでもあった。実際、一八七六年六月から七月にかけて、ボスニア北部における蜂起者たちがセルビアとの併合を一方的に宣言する事態も生じていた。このような状況の下で、ノヴィ・サドの『ザスタヴァ』誌やゼムンの『グラニチャル』誌は、「大セルビア主義」的要求を掲げつつ、クロアチアにおける民族派の機関誌『オブゾル』やダルマチアにおける民族派の機関誌『ナロードニ・リスト』を攻撃した。<sup>(25)</sup>すでに外部部のプロパガンダによってセルビア人としての「国民」意識を抱くようになっていたダルマチアの正教徒がボスニアのセルビア公国への併合を支持したのは当然の成り行きでもあった。

このような動きに対して、パヴリノヴィチは同僚カジミル・リュビチ宛の書簡の中で、ボスニアが「セルビア公国に帰属すべきではない」と

明言している。彼はセルビア人のファナティズムを警告するとともに、セルビア支配下のカトリック教徒はオスマン帝国支配下にもまして過酷な境遇となり、クロアチア人に新たな混乱をもたらすと主張した。もっとも、彼はボスニアに対するセルビアの要求は断固として認めなかったものの、その東方や南方への拡大はむしろ望んでさえいた。彼はフランスソコ修道士に対して、セルビア人の行動を妨害せず、「すべてのボスニア住民の信仰上の自由のために」闘争するよう警告している。<sup>(26)</sup>なお、パヴリノヴィチはシュトロスマイヤー宛の書簡の中で、「セルビアは偉大な事業、栄誉ある事業をなしとげる中心勢力ではない」と断言するとともに、セルビアは「古セルビア」(コソヴォとマケドニア北部)とラシュカ(ノヴィパザル・サンジャク)に、モンテネグロはゼータ地方に自らの勢力を伸張すべきであり、ボスニアに関してはクロアチアに任せべきだと主張している。<sup>(27)</sup>

一八七七年にはバルカン地域への勢力拡大をねらうロシアがオスマン帝国に対する軍事行動を開始した(ロシア＝トルコ戦争)。ロシア軍はまずブルガリアにおける戦闘で勝利し、同年末までにイスタンブール近郊に到達した。クロアチアではロシア軍の戦勝祝賀ムードが高まったが、ダルマチアと同様に、ボスニア問題をめぐる議論、すなわちクロアチア国家とセルビア国家のいずれかに併合するかの論戦が継続していた。<sup>(28)</sup>前述の通り、この時期になるとダルマチアでも国家的・国民的理念の相違による対立が激化し、例えばダルマチア州議会においてザダル郊外のアルバナシ地区の師範学校の「クロアチア化」をめぐる論争が展開される

などしている。この論争では、「セルビア人と呼ばれる人々は、どのよ  
うな点でクロアチア人と区別されるのか」というパヴリノヴィチの問い  
に対して、「セルビア人」を代表する立場のラザル・トマノヴィチが宗  
教でも言語でも習慣でもなく「意識」によって区別されると答えた点が  
注目される。<sup>(29)</sup>トマノヴィチは正教徒と「セルビア人」を同一視する一般  
的な立場ではなく、近代的「国民」の成立要件である住民の国民的帰属  
意識を重視したのである。それは、「クロアチア国法(国権)」といった  
パヴリノヴィチらの歴史主義的な主張に対する明確な反論であった。な  
お、パヴリノヴィチの教権主義・カトリック至上主義に対する批判は  
「クロアチア人」陣営からも浴びせられた。こうした批判はクライチが  
『ナロードニ・リスト』の編集者であるユライ・ビアンキーニに宛てた  
書簡においてからもはっきりと伺える。クライチは同誌が「オーストリ  
アとローマ(教皇)の機関誌と化す」ことのないよう、念を押している  
のである。<sup>(30)</sup>

##### 五. オーストリアによるボスニアヘルツェゴヴィナ占領

一八七八年、ロシアトルコ戦争は終結し、まずサン・ステファノ条  
約が締結されたが、ロシアの強大化を恐れる列強によってベルリン会議  
が開催され、条約の内容は大幅に修正された。それでもセルビア、モン  
テネグロ、ルーマニアは完全な独立国として国際的に承認されるとも  
に、それぞれ大幅に領土を拡大した。またブルガリアに自治国家が建設  
された(サン・ステファノ条約では独立が約束されていたが)。そして、

ダルマチア住民にとってもっとも重要なのは、ロシアトルコ戦争にお  
いて中立を保持していたオーストリアがボスニアヘルツェゴヴィナの  
行政権を獲得したことであった。まもなく、オーストリア軍が同地の占  
領に着手した。

オーストリア軍によるボスニア占領が確定する以前から、『ナロード  
ニ・リスト』誌はオーストリアハンガリーの政策を好意的に受け止め、  
それを支持する論説を掲載していた。<sup>(31)</sup>メテル・オジェゴヴィチのように  
「ボスニアヘルツェゴヴィナの獲得は我々の民族的再生の新時代の幸  
福な幕開けとなる」と評価する者もあった。<sup>(32)</sup>確かに、クライチのように  
オーストリアによるボスニア占領がクロアチアにとって、あるいはスラ  
ヴ人にとって不利益になると考える者がいなかったわけではない。<sup>(33)</sup>それ  
でも、クロアチアでもダルマチアでも多くの政治家が事態の推移を肯定  
的にとらえていたことは疑いないように思われる。彼らは一方では帝国  
に忠実な臣民であることを装いつつ、もう一方ではクロアチアの国家的  
権利を自負する「クロアチア国民」と化したのである。

また、「セルビア人」としての意識を強めつつあった正教徒の指導者  
たちは、この事件を契機に民族派から最終的に離脱し、一八七九年七月  
に実施された帝国議会選挙では、それまでの敵対勢力である自治派と連  
携した。とくに「セルビア人」が多数派を占めるオプロヴァツ、キスタ  
ニエ、クニンの選挙区では、彼らは民族派の指導者クライチではなく、  
自治派のグスタヴ・イヴァニチに投票し、自治派唯一の議席の確保に貢  
献した。<sup>(34)</sup>イヴァニチは「セルビア人」が多数派を占める地域での「セル

ビア語」の公用語化、ダルマチアおよびボスニアのクロアチアとの合併反対などを約束して、彼らの支持を取り付けていた。<sup>(35)</sup> 彼らは一八八〇年に機関誌『スルプスキ・リスト（セルビア新聞）』を中核として、独自の政治組織「セルビア民族党」を結成するに至った。<sup>(36)</sup> かつてパヴリノヴィチが指摘したように、セルビア人と正教徒を混同してはならないように思われるが、その後の彼らの政治的・社会的活動はすべて「セルビア人」という名称の下で行なわれることになる。

### むすびにかえて

これまで見てきたように、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ蜂起はダルマチアのスラヴ系住民の国民形成の方向性を分岐させた重大な事件であった。クロアチアおよびセルビアという「本国」からのプロパガンダによって同地の帰属問題が顕在化し、とくにセルビアへの併合を支持する正教徒が民族派を離脱してセルビア民族党を結成したことにより、ダルマチアにおけるクロアチア志向の人々とセルビア志向の人々との政治的分裂が決定的なものとなった。むろん、なおも南スラヴ主義が完全に影響力を失ったわけではないことは、二〇世紀初頭にクロアチアとダルマチアの政治家が「クロアチア人・セルビア人連合」を結成したことや、彼らが第一次世界大戦を経て南スラヴ諸民族の統一国家たるセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国の樹立に参画したことから立証されよう。しかし一方では、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ蜂起に前後して、ダルマチアのスラヴ系住民の間で「クロアチア国民」あるいは「セ

ルビア国民」という二つの異なる国民理念が、新たな発展の基礎を得たことは確かであるように思われる。より長期的な視野の分析を、今後の課題としたい。

### 注

- (1) ダルマチアにおけるボスニア＝ヘルツェゴヴィナ蜂起の影響に関するものとも重要な先行研究として、Julije Grabovac, *Dalmacija u oslobođaćkom pokretu hercegovačko-bosanske raje (1875-1878)*, Split, 1991 が挙げられる。
- (2) 一八六七年の行政区分の刷新において、ボスニア州とヘルツェゴヴィナ州がボスニア州として統合され、サライエヴォ、トラヴニク、ビハチ、バニャ・ルカ、ズヴォルニク、ヘルツェゴヴィナ、ノヴィ・パザルの七つの県が設けられた。
- (3) オスマン帝国およびオーストリア＝ハンガリー帝国が実施した国勢調査結果が残されているものの、その信頼度は高いとは考えられていない。後者による一八七八年の調査によれば、総人口は一一五万八二六四人、うち正教徒四九万六四八五人（四三％）、イスラム教徒四万八六一三人（三九％）、カトリック教徒二〇万九三九一人（一八％）となっている。Die Ergebnisse der Volkszählung in Bosnien und der Heregovina vom 10. Oktober 1910, Sarajevo, 1912等を参照。なお、同じ時期のダルマチアの人口は四七万六〇一人（面積は一万二六六三平方キロ）、クロアチア（軍政国境地帯を除く）の人口は一一九万四四一五人（面積は二万三三二六平方キロ）であった。Ergebnisse der nach dem Stande vom 31. Dezember 1880. in

*Dalmatien ausgeführten Zahlung der Bevölkerung*, Wien, 1882 及び  
 Neki rezultati popisa žiteljstva od 31. prosinca 1880, Zagreb,  
 1882 等を参照。

(4) かなり遅い時期になるが、一九一〇年の国勢調査によれば、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける地主の八五%がイスラム教徒であった。世帯主の宗教別カテゴリーは、左表の通り (*Die Ergebnisse der Volkszählung in Bosnien und der Hercegovina vom 10. Oktober 1910* (246))。

	イスラム教徒	カトリック教徒	正教徒	その他	合計
地主	一一、五六〇 (二%)	七五 (一%)	一、三九三 (一%)	六六 (四%)	一四、七四四 (四%)
自由農	七七、五一八 (七三%)	二二、九一六 (四〇%)	三五、四一四 (三〇%)	一、〇〇六 (五四%)	一三六、八五四 (四六%)
小作人	三、六五三 (三%)	一七、一一六 (三〇%)	五八、八九五 (五〇%)	一三 (一%)	七九、六七七 (三三%)
その他	一一、九〇七 (一一%)	一六、一四〇 (二八%)	二二、〇五〇 (一九%)	七六九 (四二%)	五二、八六六 (二八%)

(5) *Pojestni dnevnik o putovanju N. c. i kr. ap. vel. Franja Josipa I., Zadar, 1878* 等参照。

(6) 実現の可能性はともかく、一八七〇年にはヴルバス川とネレトヴァ川を境界線とする分割案が提示されている。Milorad Ekmečić, *Ustanak u Bosni, 1875-1878*, Sarajevo, 1973, p. 60.

(7) ロバート・J・ドニーヤ、ジョン・V・A・ファイン『ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史——多民族国家の試練』(恒文社、一九九六年) 九六頁。

(8) 一八六五年から六八年にかけて実施された地方自治体選挙では、八〇自治

体のうち過半数の四二自治体で民族派が実権を掌握した(自治派二三自治体、中間派一五自治体)。Dinko Foretić, "Borba za panarodivanje općina u Dalmaciji (1865-1900)", Jakša Ravlić, ed., *Hrvatski narodni preporod u Dalmaciji i Istri: zbornik*, Zagreb, 1969, pp. 151-159.

(9) ダルマチア州議会の直接選挙による議員定数は四一議席であり、一八七〇年の選挙では自治派一五議席・民族派二六議席、一八七六年の選挙では自治派一一議席・民族派三〇議席という結果になった。Ivo Perić, *Dalmatinski sabor 1861-1912. (1918.) god.*, Zadar, 1978, p. 62 等参照。

(10) *Narodni list*, Zadar, 17. VII. 1875. 『ナロードニ・リスト』は一八六二年にザダルで民族派の事実上の機関誌として創刊された。当初はイタリア語版の『イル・ナツィオナーレ』に対するクロアチア語版の別冊として位置づけられていたが、両者の関係は徐々に逆転した。内容的にも、当初は「スラヴ的」であったが、次第に「クロアチア的」なものに変質した。Rade Petrović, *Nacionalno pitanje u Dalmaciji u XIX stoljeću (Narodna strana i nacionalno pitanje 1860-1880.)*, Sarajevo, 1968, pp. 195-213 等参照。

(11) 『ナロードニ・リスト』等の記事によれば、七月二二日までにザダルとドゥプロヴニク、二四日までにスプリット、シベニク、コミジャ、ビオグラード、オプロヴァツ、二八日までにオプゼンとマカルスカ、三一日までにイモツキ、クニン、イエルサ、シーニ、ヴルリカ、ベンコヴァツ、ティエスノ、スペタル、ヘルツェグ・ノヴィに「委員会」が設立されている。

(12) 一八七一年の統計によれば、ダルマチアの総人口は四四万二七九六人であり、そのうちカトリック教徒が三六万三六二八人(八二%)、正教徒が七万

- 八二六六人（一八％）であった。ダルマチアに存在する八〇自治体のうち、正教徒が多数派を占めるものは二三自治体にとどまった。Luigi Maschek, *Manuale del Regno di Dalmazia per l'anno 1871*, Zadar, 1871, 参照。
- (21) Kosta Milutinović, "Srbi u Dalmaciji 1797–1878," *Istorija srpskog naroda*, V-2, Beograd, 1981, p. 306.
- (24) Dragutin Pavličević, "Mihovil Pavlinović o istočnom pitanju i Bosansko-hercegovačkom ustanku (1860–1878)," Nikša Staničić, ed., *Mihovil Pavlinović u politici i književnosti*, Zagreb, 1990, p. 195.
- (25) Mihovil Pavlinović, "O Slavenstvu, Jugoslawenstvu, Srbo-hrvatstvu, Srbstvu i Hrvatstvu," *Hrvatski razgovori*, Zadar, 1877, p. 161. なお、引用箇所は『クロアチア対話』収録の「スラヴ主義、南スラヴ主義、セルビア＝クロアチア主義、セルビア主義あるいはクロアチア主義について」における登場人物ペタルの発言。多様な国民理念の違いを民衆向けに会話形式で平易に解説したこの作品において、パウリノヴィチが自己の立場をクロアチア主義者ペタルに投影していることは明白である（この他にセルビア主義者ステヴァ、スラヴ主義者ヴラホなどが登場する）。以下の引用箇所も同様。
- (19) Ibid., p. 153.
- (17) Ibid., p. 156.
- (28) Ibid., p. 155.
- (29) Grga Novak, "Dalmacija na raskršću 1848. god.," *Rad JAZU*, 274, Zagreb, 1948, pp. 138–139.
- (23) Mihovil Pavlinović, "O Slavenstvu, Jugoslawenstvu, Srbo-hrvatstvu, Srbstvu i Hrvatstvu," p. 154.
- (22) Ibid., p. 150.
- (23) F. Rački – J. J. Strossmayeru, 24. V. 1875, Ferdo Šišić, ed., *Ko-respondencija Rački Strossmayer*, I, Zagreb, 1928, p. 354.
- (23) Dragutin Pavličević, "Mihovil Pavlinović o istočnom pitanju," p. 193.
- (24) 南スラヴ主義に対する批判には、クロアチア権利主義の影響も看取できる。Ibid., p. 197. なお、この時期のクロアチアにおける国家・国民理念の変化については、月村太郎『オーストリア＝ハンガリーと少数民族問題——クロアチア人・セルビア人連合成立史』（東京大学出版会、一九九四年）が参考になる。
- (25) 例えば、*Zastava*, br. 51, Novi Sad, 15. IV. 1877等。なお、『サスタヴァ』は一八六六年にブダペストで創刊され、翌年ノヴィ・サドに移転したハンガリー南部ヴォイヴォディナ地方在住セルビア系リベラル市民層のための雑誌で、統一青年セルビアおよびセルビア民族自由党の創設者の一人であるスヴェトサル・シレイチが編集に携わった。
- (29) F. Lukas, "Pavlinović o Bosni. Jedno značajno pismo o pripadnosti Bosne i Hercegovine," *Hrvatsko kolo*, XXII, Zagreb, 1941, p. 15.
- (22) M. Pavlinović – J. J. Strossmayeru, Zadar, 25. VII. 1876, Arhiv HAZU, Ostaština Josipa Jurja Strossmayera.
- (28) 詳細を以下を参照。Dragutin Pavličević, *Polemika između hrvatskih i srpskih listova o pripadnosti Bosne i Hercegovine u doba*

*ustanka 1875–1878. godine*, Sarajevo, 1977.

- (33) *Izvišća Brzopisna i Analitična XVI. zasjedanja zemaljskog sabora dalmatinskoga od dneva 15 sječnja do 5 veljače 1877*, Zadar, 1877, p.105.

- (34) M. Klaić – J. Biankiniju, Dubrovnik, 20. I. 1878; Hrvoje Morović, "Pisma Miha Klaića uredniku > Narodnog lista < Jurju Biankiniju," *Radovi Instituta JAZU u Zadru*, VI–VII, Zagreb, 1960, p. 287–288 (pismo 16).

- (35) Šime Peričić, "Narodni list o hercegovačko-bosanskom ustanku," *Zadarska revija*, br. 4–5, Zadar, 1975, p. 396.

- (36) M. Ožegović – M. Pavlinoviću, Bela kod Varaždina, 17. VII. 1878; Ante Palavrišić et al. eds., *Korespondencija Mihovila Paulinovića*, Split, 1962, p. 266 (pismo 198).

- (37) 注 (30) 参照。

- (38) *Narodni list*, Zadar, 9. VII. 1879. クライニチが七一票、イヴァニチが八四票を獲得した。オヴロヴァンとキスターニエではイヴァニチが満票を得ていた。

- (39) *Zastava*, Novi Sad, 18. VII. 1879.

- (40) Rudolf Horvat, *Hrvatski preporod u Dalmaciji*, Zagreb, 1935, p. 85.